

# 序『カラム』の時代Ⅳ

## マレー・ムスリムによる言論空間の形成

坪井 祐司

本論集は、1950年から1969年までシンガポールで発行された月刊誌『カラム (Qalam)』について、テーマごとに掲載記事を紹介する研究ノートをもとめたものである。以下では、まず『カラム』誌について簡単な紹介を行ったうえで、この論集のもととなった『カラム』プロジェクトおよび本論集の各論の内容を紹介する。なお、この本編は『カラム』を利用した共同研究における論集の四編目にあたるものである〔山本編2010、坪井・山本編2011、坪井・山本編2012a〕。このため、『カラム』誌およびプロジェクトの紹介については、それぞれの論集の序論と重なる部分があることをあらかじめおことわりしておきたい。

### 1. 『カラム』について<sup>1</sup>

『カラム』は、1950年7月にシンガポールにおいてアフマド・ルトフィ (Afmad Lutfi) により創刊され、ルトフィの死去により1969年10月を最後に停刊するまで228号が発行された。この20年間という発行期間は、創刊後1、2年で停刊となることがめずらしくなかった当時のマレー語雑誌としては長命なものといえる。

『カラム』の特徴は、その記事が一貫してジャウィ (アラビア文字を改変したマレー・インドネシア語の表記法) によって書かれていたことである。マレー・インドネシア語の表記法は、この地域のイスラム<sup>2</sup>化とともにアラビア文字を使用したジャウィが主流となった。しかし、19世紀後半以降ヨーロッパの植民地権力によりマレー語の公式のローマ字表記が定められ、行政や教育の場で使用されるようになると、徐々にジャウィはとってかわられていった。旧オランダ領 (現インドネシア) 地域では20世紀初頭以降、旧イギリス領 (マラヤ、シンガポール) でも1960年代までに多くのマレー語刊行物がジャウィからローマ字表記に切り替

わった。しかし、『カラム』は創刊以来1969年の停刊まで一貫してジャウィ表記を固守した。これは、『カラム』が非ムスリムを含めた幅広い読者を獲得することよりも、対象をムスリムに限定した主張を発信することを目指していたためであろう。

それとともに、『カラム』はジャウィを使用することで国境を越えた東南アジアのムスリムの紐帯を強調した。シンガポールで発行されていた『カラム』の主な読者はシンガポール、マラヤ在住者であったが、執筆者のなかにはシンガポール、マラヤだけではなくインドネシアのムスリム知識人も含まれていた。このため、インドネシアやその他東南アジアのムスリム社会の情勢を含む幅広い内容の記事が掲載された。さらに、エジプトなど中東で学ぶ留学生も寄稿しており、中東のイスラム思想を積極的に紹介した<sup>3</sup>。

『カラム』のさらなる特徴は、この地域の他の定期刊行物との交流である。『カラム』の記事のなかには、他の刊行物に掲載されていた記事が転載されたものもある。また、英語も含めて新聞・雑誌記事などを引用し、それに対して論評を加えたものもある。このため、『カラム』をみることで、単に同誌の主張というだけでなく、当時のこの地域のジャーナリズムの世界でなされていた議論のあり方や内容をうかがうことができる。

以上の特徴をふまえると、『カラム』は当時の東南アジアにおけるムスリム知識人の思想が強く打ち出されたものといえよう。『カラム』が刊行されていた1950年代、60年代はマラヤ (マレーシア)、シンガポール、インドネシアにおける独立および国家建設の時期である。この時期に関しては、それぞれの国民国家の建設に関心が集中していることもあり、同時期の政治や社会におけるイスラム主義勢力の動向には焦点が当てられてこなかった。しかし、『カラム』からは、当時のムスリム知識人がこれらの国々が独立国家となっても、互いの政治情勢を観察し、さまざまな形で国境を越えたム

1 『カラム』誌については、〔山本2002a〕が詳細な紹介を行っている。

2 現在学術用語としてはイスラムと表記するのが一般的であるが、マレー・インドネシア語には長母音が存在しないため、本稿では現地の発音に即してイスラムと表記する。ただし、以下の各論において用語の選択は著者にゆだねられているため、表記が混在する結果となっていることをあらかじめお断りしておく。

3 編集者アフマド・ルトフィが1956年にシンガポールのムスリム同胞団を結成すると、『カラム』編集部は事務局となり、『カラム』は同団体の事実上の機関誌となった。

スリムの連帯を模索していたことが明らかになる。

『カラム』は当時のマレー・イスラム世界のムスリム知識人の思想や活動を明らかにする上で貴重な資料である。しかし、これまで『カラム』は十分に利用されてこなかった。これは、『カラム』がジャウィで書かれているために利用者が限定されてしまっていたことにくわえて、複数の機関に分散して所蔵されていたため体系的に利用するのが困難であったことなどが理由として考えられる。

以上の認識のもとで、本論集のもととなる『カラム』プロジェクトは、『カラム』を収集して一つの資料として集成したうえで、記事の見出しおよび本文をローマ字に翻字してデータベース化し、一般公開して研究のための便宜を向上させることを目的としている。

## 2. 『カラム』プロジェクト

現在の『カラム』プロジェクトは、京都大学地域研究統合情報センター（以下京大地域研と略記）の共同研究「島嶼部東南アジアにおける国民国家形成とマレー・ムスリムのネットワーク（研究代表者：坪井祐司）」および「ジャウィ文献と社会」研究会が中心となって行われている。『カラム』の所蔵機関である京大地域研の共同研究は、山本博之を中心として立ち上げられ、本年度で4年目となる。「ジャウィ文献と社会」研究会は、2009年に解散したジャウィ文書研究会の研究を継承し、発展させるための研究会の一つである<sup>4</sup>。

プロジェクトは、『カラム』に関するデータベース構築、一般向けのジャウィ文献講読講習会、『カラム』を使用した研究などから構成されている。ここでは、プロジェクトのこれまでの成果と今後の方向性についてまとめてみたい。

### （1）『カラム』雑誌記事データベース

プロジェクトの基礎となる資料である『カラム』は、山本博之により収集された。山本は、シンガポール国立大学図書館、マラヤ大学ザアバ記念図書室における資料収集により、『カラム』全228号のうち212号を収集した。そして、京大地域研が進めている雑誌記事データベース・プロジェクトの一部として、『カラム』紙面のデジタル化し、それぞれの記事の見出しのローマ字翻字を関連付けする作業を行った。これにより、ロー

マ字による記事見出しの検索により当該紙面を呼び出すことができるデータベースが作成され、一般に公開されている<sup>5</sup>。

ただし、『カラム』雑誌記事データベースは、現在のところローマ字による記事見出しの検索にとどまっており、記事本文の検索はできない。本文も検索の対象とするためには、記事をローマ字に翻字してデータ化し、それをデータベースに連結する必要がある。このため、2009年から「ジャウィ文献と社会」研究会のメンバーによる『カラム』の記事本文の翻字作業が開始された。この作業は、参加者が自らの関心に沿った記事を選んで翻字を行う形態をとっている。

さらに、2011年度からは京大地域研の地域情報学プロジェクト（雑誌データベース班）による『カラム』記事のローマ字翻字が開始された。これは、マレーシアの出版社・クラシカ・メディア（Klasika Media）社との提携により行われているもので、『カラム』のすべての記事を年代順に翻字し、検索が可能なPDFファイルをジャウィ版と同様のレイアウトにして作成するものである。この成果は、「ジャウィ文献と社会」研究会のホームページにて順次公開されている。そして、プロジェクトメンバーのブルドン宮本ジュリアン（京大地域研）による『カラム』データベースの改良も進行中である。その内容は、翻字された記事本文をデータベースに組み込み、本文中の単語の検索から当該紙面を読み出せるようにすることにくわえて、コーランなど他の文献データベースと接合してさまざまな関連検索を可能にすることである。これについては、本編のブルドン・山本論文を参照されたい。

さらに、『カラム』雑誌記事データベースは、他のマレー・インドネシア語文献データベースとの接合も構想されている。さしあたり、期待されるのは以下の方向である。

第一に、『カラム』以外の資料を含めたマレー・インドネシア語文献の統合データベースの構築である。地域や時代を越えた記事の横断的な検索は、マレー・インドネシア語定期刊行物の研究には重要である。マレー・インドネシア語雑誌は短期間のうちに停刊となるものが多いが、同じ編集者や執筆者が別の雑誌を立ち上げることもめずらしくない。くわえて、その内容においても、雑誌の枠を越えた引用や論争が行われて

4 「ジャウィ文献と社会」研究会の詳細については、ホームページを参照されたい。 <http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/~yama/jawi/>

5 『カラム』のデータベースについては、以下の URL を参照されたい。 [http://area.net.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta\\_pub/G0000003QALAM](http://area.net.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000003QALAM)

きたため、複数の雑誌を一つの言論空間、資料群としてとらえる必要がある。このため、京大地域研の雑誌記事データベース・プロジェクトでは、刊行期間が長いマレー・インドネシア語定期刊行物を収集し、誌面のデジタル化および記事見出しによる検索可能なデータベース作成を進めている<sup>6</sup>。

もうひとつは、オーストラリア国立大学が実施しているマレー語文献コンコダンスプロジェクト(以下MCプロジェクトと略記)との連携である<sup>7</sup>。MCプロジェクトでは、主に20世紀以前の王統記を中心に本文テキストをローマ字化したものをもとにコンコダンスを作成し、データを順次公開している。また、シンガポール国立大学は1930年代のマレー語日刊紙のローマ字翻字を行っており、この結果をMCプロジェクトと接合することが計画されている。これに1950、60年代を主に扱う京大地域研の雑誌記事データベースを接合することで、より広い範囲のマレー・インドネシア語文献を包括した統合データベースを構築することができよう。

## (2) ジャウイ文献講読講習会

『カラム・プロジェクト』の活動の二つ目は、マレー・インドネシア語既修者を対象にジャウイ文献講読講習会を開催することである。講習会は参加者を一般公募して行っており、日本において触れる機会の少ないジャウイを学ぶ機会を提供することと、一般公開形式の活動をすることでジャウイに関心を持つ研究のネットワークを深化させることを目的としている。講習会は2009年以来年1回行っており、2012年は地域研究コンソーシアム、日本マレーシア学会との共催により12月1、2日の2日間に実施した。講習会は、日本で唯一のマレーシア語専攻を有し、ジャウイをカリキュラムに組み込んでいる東京外国語大学のファリダ・モハメド講師の全面的な協力を受け、同大学にて開催した。2011年からこの形式で開催するようになり、今回が2回目であるが、前回に続いて東京外国語大学の学生を中心に多数の参加者を得ることができ、あらためてジャウイに対する関心の高さが示された。

研究会では、講習会のための教科書『ジャウイを学ぶ』を編集した[坪井・山本編2012b]<sup>8</sup>。これは、ジャウイの読み方・綴り方を開設した[山本2002b]を採録した



2012年の文献講読講習会には東京外国語大学の学生約20名が参加

ジャウイ講読の初級編、『カラム』記事から引用した講読テキスト、近代におけるジャウイの定期刊行物(『ジャウイ・プラナカン』、『アル・イマム』など)の実物を掲載しその解説を行った「さまざまなジャウイ文献」、研究会メンバーが各自の専門分野におけるジャウイ資料を紹介・解説した「資料編」からなっている。

## (3) 『カラムの時代』

プロジェクトの活動の第三は、『カラム』を利用した研究活動である。プロジェクトでは、メンバーがそれぞれの問題関心にに基づき『カラム』の記事を利用した研究を行っている。共同研究では年に3回程度の研究会を開催して議論を行っており、その成果としてまとめられたのが本論集である。ディスカッションペーパーは2010年以来年1回発行されており、これが4編目となる。その内容については次節で紹介することとしたい。

さらに、プロジェクトでは、2013年1月5、6日にマレーシア・クアラルンプルのマラヤ大学にて行われた国際会議「イスラームと多元文化主義」(早稲田大学イスラーム地域研究機構、マラヤ大学アジアヨーロッパ研究所の共催)にセッション企画を組む形で参加した。セッションは、「見えない公共圏を解き明かす:『カラム』のデジタル・アーカイブ化」と題して、これまで十分に利用されてこなかった『カラム』の内容紹介とそのデジタル化の意義を強調したものである。参加者は、山本博之(司会)、ブルドン、國谷徹、筆者、モハメドファリド(Mohd. Farid Mohd. Shahrar, マレーシアイスラーム知識研究所 Institut Kefahaman Islam Malaysia)(ブルドン以下は報告順)であった。セッションでは、ブルドンが『カラム』データベースについて報告し、後の三人が『カラム』を利用した研究成果を報告

6 京大地域研でデータベース化を進めている雑誌の詳細については、[山本編 2010: 6]を参照されたい。

7 詳細については、プロジェクトのホームページを参照されたい。  
<http://mcp.anu.edu.au/Q/mcp.html>

8 この教科書は、2011年に編集された初版をもとに、資料編等で新たな内容を収録した改訂版である。



京都大学地域研究統合情報センターで進めるジャウィ雑誌のデジタル化とデータベース作成事業について発表するジュリアン氏  
(2013年1月7日、マレーシア言語出版局)



言語文化出版局の各部門の担当者と研究会メンバー。言語文化出版局からは局長代理のほかに図書室、交流事業部門、著作権、ジャウィ文献の各担当者が出席 (2013年1月7日、マレーシア言語出版局)

した。また、1月7日にはマレーシア言語出版局 (Dewan Bahasa dan Pustaka, DBP) を訪問し、マレー語資料のデジタル化、データベース化に関する意見交換を行った。

プロジェクトでは、今後ともマレーシアの研究・出版に関わる諸機関と連携し、デジタル化した『カラム』の公開、共有を進めるとともに、研究面でも国際的な共同研究へと発展させていくことを計画している。

### 3. 本論集の構成

本論集は、研究会のメンバーが『カラム』の記事本文のローマ字翻字の作業を通じて得られた考察をまとめたものである。翻字プロジェクト参加者は、各自の関心に基づき記事を選び、翻字作業を行っているため、全体としての統一的な対象時期やテーマが存在するわけではないが、本論集では以下のような構成となっている。

#### ブルドン宮本ジュリアン・山本博之「アラビア文字・多言語文書の横断検索システム構築：『カラム』記事のコーラン引用部分表示の試み」

ブルドン宮本と山本は、『カラム』の記事とコーランのテキストをデータベース上で結びつける事例を通じて、『カラム』と他の文献データベースとの間の横断検索システムの構築過程を提示した。『カラム』のようなイスラム雑誌では、コーランなどの宗教関係文書からの引用が原語でなされるため、マレー語の文章の中にアラビア語の単語や文が混じる。そこで、アラビア語とローマ字のそれぞれによる電子版のコーランを用いて、『カラム』記事データベースのなかでインデックスを作成した。利用者が『カラム』のジャウィ版の記事を指定すると、それに該当するローマ字記事をもとにコーランの記事が検索され、検索結果がコーランの

章句のアラビア語とマレー語訳としてジャウィ版の記事に対して示される。これは、意味的な注釈に基づいたアプローチによって利用者が『カラム』の文脈を理解するのを助けるアプローチの一例である。

#### 坪井祐司「マラヤの独立とシンガポールのマレー・ムスリム」

坪井は、マラヤ独立前後の1950年代後半の『カラム』のマラヤに関する論説を取り上げた。同誌はマレー・ムスリムの政治的権利を強く主張したが、マラヤの独立を必ずしも歓迎しておらず、マレー人が民族として独立の責任を担えるかを懸念していた。彼らはイスラム教にもとづいた国家の運営を求め、理想の実現のためにムスリムコミュニティ全体に自覚を促した。特に指導者の責任を強調し、国家の運営に直接携わる人に対して彼らの理想の実現にむけた行動を求めた。ただし、その方法論かなり現実主義的であった。インドネシアを反面教師として資格のあるものが統治すべきと主張し、行政制度を整えたうえで選挙に勝利し、政策に影響力を持つことを志向した。彼らは、イスラム国家を理想として掲げながらも、既存の制度や秩序の変革を求めるのではなく、イギリスが構築した国家制度の運用を改善し、そのなかでの主導権を握ろうとした。

#### 光成歩「シンガポール・イスラム宗教評議会 (MUIS) 誕生をめぐる諸問題」

光成は、1966年に制定されたムスリム法施行法に対する『カラム』の論説を取り上げた。『カラム』は、公的な制度としてイスラム行政を確立することには肯定的な立場であったが、1966年法案に批判的な反応を示した。同法は、マレーシアの各州ですでに設置されていたイスラム宗教評議会という行政の構造を下敷きにしており、同評議会が国家機関の干渉にさらさ

れることへの危機感からであった。『カラム』の批判は、法案の草稿と審議に携わったアフマド・イブラヒム司法長官や、ムスリム諮問委員会にも向けられた。これは、諮問委員会の人選を通じて政府の干渉を受けるという理由であった。そして、非ムスリムに同様の法律がない社会においてムスリムのみを拘束する法律は不平等であると主張した。法の下での平等という原則に依拠して展開されたこの意見書の論述は、それ以前の『カラム』の論調とは趣を異にするものであった。

#### 金子奈央「ザアバの教育論」

金子は、1953年の4月から8月の間に、5回に渡り掲載されたザアバの連載「イスラムにおける基礎道徳：子どもに対する教育」を取り上げた。ザアバは、学校教育の実践や教育行政の現場で活躍してきたマレー・ムスリムの知識人・教育者とみなされるが、連載では学校など制度的な教育は一切言及されなかった。一方で、彼は家庭教育の重要性を強調し、イスラムの教えを「正しく」子どもに伝達し、子どもがそれを正しく理解し、正しい人間となるための責任は両親が負っているという主張を展開した。子どもの躾や道徳教育は家庭における両親の仕事であるという意識のない大人が多いとザアバは考えており、イスラムにもとづき子どもを正しい人間へと導く教育は家庭という場で両親によってなされるべきと主張した。彼が連載で一貫して主張したのは、イスラム教育における家庭の重要性であり、両親の子どもの躾に対する義務の重さであった。

#### 4. 『カラム』の時代：

各論考はいずれも限定された資料をもとにした試論であり、当該時期の社会全体への位置づけについては今後の検討課題となるであろう。ここでは、暫定的なまとめとして、本書の4編の論考から浮かび上がる『カラム』研究の意義と当該時期におけるシンガポールを中心とするマレー・ムスリムの社会的な位置づけについて簡単に記してみたい。

ブルドン宮本・山本論文は、『カラム』研究の一つの発展の可能性を示している。『カラム』は、記事のなかに多くの引用を含んでおり、その代表格がアラビア語の聖典の章句である。そこから発展的な検索ができるデータベースを構築することにより、イスラム思想という文脈から記事単体のみからでは明らかにならな

い新たな視角を得ることが可能になる。

『カラム』の記事を分析した三編の論文は、政治、教育、法制度という分野においていずれも同時代のムスリム同士の論争の存在が前提となっている。本プロジェクトでは、これまでの論集において『カラム』がイスラムにもとづく国家・社会の制度化を一貫して主張してきたことを明らかにしてきた[山本編2010、坪井・山本編2011、坪井・山本編2012a]。一方で、マラヤの脱植民地化における国家・社会制度の構築過程は、彼らの構想とは異なるものであった。このため、彼らは既存のムスリムの指導者層への批判を織り交ぜつつ、読者のムスリム個人に対して現状の変革を訴えた。『カラム』の背後には、脱植民地化期に急拡大したマレー・ムスリムの言論空間が存在している。

これらの論考は、同時代の他者との相互作用を考慮することでさらなる発展の可能性を持つ。ただし、マレー・ムスリムの言論空間は大規模なものであり、そこで求められるのがデータベースのさらなる拡充である。同時代の他の定期刊行物に関しても関連検索を行うことができれば、『カラム』の世界をより総合的に描き出すことができる。データベースの拡充とこうした研究を相互に発展させていくことで、諸事例をより広い文脈へと位置づけ、『カラム』が発信された社会や時代のあり方を明らかにすることが可能になるといえよう。

#### 参考文献

- 坪井祐司、山本博之編 2011a 『『カラム』の時代Ⅱ——マレー・イスラム世界における公共領域の再編』京都大学地域研究統合情報センター。
- 坪井祐司、山本博之編、ファリダ・モハメッド協力 2011b 『ジャウィを学ぶ』(CIAS Discussion Paper No.27) 京都大学地域研究統合情報センター。
- 山本博之 2002a 「資料紹介『カラム』」『上智アジア学』、20: 259-343。
- 山本博之 2002b 「ジャウィ綴りマレー語の書き方と読み方：20世紀マレーシア地域を中心に」『上智アジア学』、20: 359-382。
- 山本博之編 2010 『『カラム』の時代——マレー・イスラム世界の「近代」』(CIAS Discussion Paper No.13)、京都大学地域研究統合情報センター。
- 山本博之編 2012a 『『カラム』の時代Ⅲ——マレー・イスラム世界におけるイスラム的社会制度の設計』(CIAS Discussion Paper No.23)、京都大学地域研究統合情報センター。